

第50回北海道高等学校教育研究会  
英語部会研究集会

# 高等学校に於ける 「CAN-DO」の作成と活用 —TEAM HUKUOKAの実践報告—

2013年1月10日 @札幌大学

岩手県立福岡高等学校

教諭 松尾 美幸

# <内容>

- 1 学校概況
- 2 CAN-DOリスト作成の手順
- 3 CAN-DOリスト作成の工夫と問題点
- 4 CAN-DOリストの活用
- 5 成果と課題

# 1 学校概況

## ○岩手県立福岡高等学校

- 岩手県で3番目に歴史の長い伝統校  
(今年創立111周年)
- 校是：質実剛健・文武両道
- 普通科
- 2010年8月校内英語授業改善プロジェクトE-DASH PLAN始動

## 2 CAN-DOリスト作成の手順①

### ●前提として教師側に必要なこと

(1) 育てたい生徒像 (生徒観) の共有

= 「センター試験〇〇点得点できる生徒」からの脱却

(2) 4技能統合型授業スタイル (授業観) の共有

= 「文法訳読・講義形式」の授業からの脱却

(3) 「到達目標・指導・評価の一体化」 (指導観)  
の共有

(4) 英語を「ことば」として教える決意 (言語観)  
の共有

## 2 CAN-DOリスト作成の手順②

- (1) 卒業時の到達目標達成に必要なスキルのディスクリプタ ⇒英語検定準2級レベル・GTECスコア450を基準に並べ、枠を作成
- (2) 実践している言語活動を枠に入れていく。
- (3) シラバス内の学習目標に落とし込む際に、より具体的なCAN-DO表記にする。  
⇒学年による基準Grade目標の明確化
- (5) 実際に活用する中で、過不足や文言の適切さを検討し、調整・修正を図る。

### 3 CAN-DOリスト作成の工夫と問題点①

#### (1) 工夫

- ① **生徒の英語力の格差への対応**  
= 共通の目標と指標では、CAN-DO LISTが  
CANNOT-DO LISTに終わってしまうおそれ  
⇒ 3~5種類のリストを1枚のCAN-DO GRADEに
- ② **生徒個々の伸びに着目** (各生徒: 入学~卒業=2 グレードアップ)  
⇒ 到達時期の明記: 個人差のため困難
  - ・Gr. 1 ~ Gr. 3までは比較的ハードルを低く
  - ・Gr. 4~ Gr. 6は上位者にとってchallengingに
- ③ **既存の客観的評価指標に基づいたCAN-DO LIST等の  
ディスクリプタの織り込み**  
⇒ 尺度調節・ディスクリプタの追加・指導者間相互理解に有益

### 3 CAN-DOリスト作成の工夫と問題点②

#### (2) 問題点

##### ① ディスクリプタ作成に関する問題点

- ・下位技能についてのディスクリプタは？
- ・「音読」はリーディング？和文英訳はライティング？
- ・扱う英文の難易度設定は？
- ・どこまで具体的な記述に？

##### ② 評価に関する問題点

- ・数値目標は妥当？
- ・評価方法は？（評点・評定への反映？）

##### ③ 検証・修正に関する問題点

- ・調査アンケート？⇒データの分析・検証は？

## 4 CAN-DOリストの活用①

CAN-DO GRADE = 参照枠  
リスト作成時の尺度設定枠



CAN-DO LISTによる具体的到達目標  
⇒ シラバスへの反映  
(シラバスでの指導目標・学習到達目標 = CAN-DO)



各授業での「本時の目標」へ  
更なる具体への落とし込み

## 4 CAN-DOリストの活用②

- (1) 指導者・生徒、指導者間の目線合わせ
  - = 到達目標の共有化
  - = **3年間の言語活動の見取り図**
  
- (2) リスト作成時の尺度設定枠
  - = 学力差が大きい生徒集団において
  - 生徒が **「自分にできること」**
  - 「できるようになりたいこと」**
  - を意識するための評価機会の保障

# 5 成果と課題①

## (1) 生徒の変容:

- ① 4技能のバランスのとれた伸長 Skill 発達
- ② 英語で話す・書くことへの抵抗の減少⇒質的・量的な向上
- ③ 学習意欲の向上

## (2) 教員の変容

- ① 教員集団としての成長
- ② 授業力向上への意欲の昂揚

生徒・教師が、学習をとおしてできるようになったことを確認しはじめる



- ・より具体的な学び
- ・運用能力・学習意欲の向上
- ・指導力の向上



授業の質の向上

## 5 成果と課題②

### <今後の課題>

- (1) ディスクリプタの内容・種類の精査
- (2) 生徒向けCheck List の開発・活用
- (3) CAN-DOを落とし込んだタスク開発
- (4) 評価規準・評価基準の検討と評価方法の研究
- (5) パフォーマンス・テストの内容と評価方法の研究
- (6) 到達目標設定の妥当性の検討  
⇒生徒の意識・実態を反映した修正方法

# まとめ

- CAN-DO とは
  - = 何ができるようになるべきなのかを、生徒と教師が把握するための道しるべ
  - = 現状・目標の明確化
  - ⇒ よりよい指導、よりよい学習を促すためのもの

生徒にとっては “*Yes, I CAN-DO it.*” と言えるための  
教師にとっては “*Yes, you CAN-DO it.*” と言って  
生徒の背中を押してやるための  
教師集団にとっては “*Yes, we CAN-DO it.*” と共に  
前進していくためのツールである。